

『初恋』 砂川 兼太朗 (青年たちの初恋の物語 四千三百字)

雲ひとつない朝がこの島に似合いすぎるのは、その青と亜熱帯の緑がどこまでも広がるからで、この朝の色彩が、佑介にとっては押しつけがましく、ずっと朝が憂鬱なのは、ここで育ったせいだと信じている。蝉が鳴き、風が遠くから潮の香りを運んだ。

母のかしこしい声が朝の憂鬱に拍車をかける。見かねた母に布団を剥がれて、佑介はようやく起きた。目覚めたとは言えない頭で、ぼんやりと歯を磨く。母が焼いてあったトーストを乾いた口に入れ、テレビから流れる「今日も元気にいってらっしゃい」という言葉をも、牛乳と一緒に流し込んだ。

制服のシャツの純白が気に入らない。いまこころは鬱蒼としていて、先月の十五歳の誕生日を迎えてから、自分の外側にある色と、内側の色とに違いがあることに気付き始めた。

遅刻はしない時刻ぎりぎりに家を出て、自転車にまたがった。学校に行くまでの道、ここを通るときだけ佑介は朝を認めた。

「おはよう」

決まった時刻に、家のガレージから出てきて美幸が佑介に声をかける。澆漑とした美幸の声に、佑介は不愛想に返事をした。

美幸といつしか会話がでなくなったのは、美幸がふたりの共通の先輩の彼女になってからで、幼馴染でもあるふたりの会話はこの朝の挨拶だけになった。

授業の先生の声は、教室の扇風機の生ぬるい風に乗って、ただお経のように鳴るばかりで、真面目にノートをとる生徒のほかは机に突っ伏し、蒸し暑い教室から、佑介は窓の外を見ている。

窓外の校舎に止まった燕のかくかくした動きが挙動不審に見え、雄大で自由な姿は空を飛ぶときだけだと佑介は思った。地上に降りれば、鳥も人間と変わらなかった。

放課後、いつもの三人と学校近くの商店で駄菓子を買ひ、そのうちの一人の家でいつも青年たちはたむろした。煙草吸うか、と訊かれて、佑介は吸わないと答えた。

友人らに、この心の鬱蒼を打ち明けるのを佑介はためらった。おそらくこいつらにはわからないだろう、もしくは笑われるだろうと思っていた。

胸の内に手に取るようにある悩みの名を自分自身も知らない。直視することを避けているせいでもあるが、ただ、はつきりと胸の奥を締め付けるような形がある。唯一、名付けるとすれば痛みだ。

痛みが出したのは、美幸のことを友人づてに聴かされてからで、その日増しに強くなっていく痛みに効く処方を佑介はこの頃発見した。痛みは、こうして友人らの前でお道化るとき和らぐのである。そのおかげで、彼は友人らからひょうきんものの称号を与えられ、悲しいときに笑うという、最も強く、そして、最も悲しい癖が身に着いた。校内で一番の美幸の話題になったとき、道化はひどくなった。

だから、彼は怒りを表現することができなくなった。笑うはずの人間が怒りを見せれば、

友人らはもう二度と彼の笑顔を信じることができなくなるし、自分自身も痛みから逃れることができなくなるから。

友人らと別れ、家に帰るしかなかったが、太陽はまだ海には沈んでいない。何かを待つように佑介は自転車を押して歩き、美幸の家が近づくと、歩度が緩まることに佑介はそ知らぬふりをした。

「あら、佑ちゃん」期待どおりではなかったが、美幸の母だった。

「久しぶりだわね、佑ちゃん。見ない間にまた大きくなって。最近、話もしてくれないって、美幸が寂しがってたわよ」

佑介は、久しぶりに会う美幸の母へ強い口調で、「寂しがってなんかない」と返した。言ったあと、少し悪い気がした。

「あら、そう、まあとにかくまた遊びにいらっしやい。美幸にもそう言うておくから」

美幸の母は、玄関の扉の前を飾ったインパチェンスに如雨露で水をやりながらそう言つて、家の中に戻った。二階建ての家の二階の道路に面した窓は、美幸の部屋の窓である。半開きのカーテンレースから暖色の光が漏れ、薄暗くなった外を照らしている。

母に今し方のことを聴かされたからだろう、窓が開かれ、美幸が顔を出した。

その何の苦悩もないような笑顔の美幸が現れると、佑介は自転車を押さずにはいられなかった。しばらく歩いてから、背びらを返したとき、美幸の姿はなかった。

あったのは、決まりの悪さに頬を染めたような色の、遠い水平線に沈んでいく太陽があった。

この島には似つかわしくない白い肌と、島に育った澄んだ黒い瞳、その鼻梁は、美しい女の条件である冷たい印象を与えた。

物心ついたときには知っていた美幸のことを、中学に上がったときには意識しはじめ、おそらく美幸も同じ気持ちであることを佑介は信じていた。それはこの時期にしかない宇宙的な力で、言葉ではないなにかですべてがわかるような、あの力で佑介はそう信じていたのである。

また同じクラスになった、今年の春に、誰かをはやしたてる悪戯な少女らの声が甲高い理科室に佑介が入ったとき、声は止み、桃色の空気が逃げるように散り、残された美幸も佑介を一瞥し、恥じらうように友人らを追ったときのことである。

佑介は、おそらく自分が彼女たちの話題になっていただろうことは勘づく。目に入った黒板の右下の角に、本来、今日の日直のふたりの男女が書かれるはずのところに、自分と美幸の名が書かれ、相合傘で描かれていたのを見た。そして、傘の上には五月三十日と書かれ、一か月後のその日に何かが起こることを少女らもまたあの力で予言をしたのだ。

美幸は待った。しかし、その日には、この島の只中の梅雨の雨が降っただけで、少女たちの予言はずれた。

雨に濡れ、佑介は自転車を学校に置いて、その日は歩いて帰った。佑介も待った。何かを

期待するように。しかし、少年の淡い期待も叶うことはなかった。それから一月が過ぎて、美幸が先輩と付き合ったことを聞いた。

なにもない日々から抜け出そうと、思案を繰り返したけれども、壊すことでしか再生の道はなかったから、佑介は日常を壊してみた。

部屋の窓から抜け出して、枯れすすきが茂る近くの公園の滑り台から、澄んだ晩秋の空を見上げた。星が美しかった。

なにかを失うと、こうして強くなれることを佑介は知った。すべては引き換えだった。

頭と鉄の間に敷いた手の甲の冷やかさを、いま世界で何人が知っているだろう。遠い国の言葉も通じない人間と会話をしているような気になった。

映画で見た、こういうとき、寒い国なら吐く息は白いのだろう。この島に、そこまでの寒さはない。僕にはなにかないのだろう。あるものは知っているから、ないものを指折ってみた。

腕つぶし、怒り、粗雑さ、煙草を吸えないこと、やはり自分には男らしさが欠けているようだ。友人らがたまに僕を女だと馬鹿にするとき、本当にそうじゃないのかと怯えてしまう。ただ、男らしさを望んでも、道化のようにすぐには手に入らなさそうだし、街中でたまに見かけるこれ見よがしの筋肉をつけることが男らしさだとも思わないし、訪れないかもしれないが、待つしか方法はなさそうだ。

望んでいるときにはなかった偶然が、望まなくなったとき起こる不思議が佑介に起こった。

持ってきたウォークマンを聴こうとしたけど、鈴虫が鳴いているのに気づいて、耳を澄ましていると、誰もいないはずの公園で、横のブランコを漕ぐ音が聞こえたから、身を起こし、滑り台から見下ろすと、そこには美幸がいた。

佑介は偶然を信じていた。こんなとき、臆病ではなくなって、佑介は大胆になった。滑り台を駆けて降りて、美幸の隣のブランコに座った。

美幸も、誰もいないはずの公園だと思っていたから、突然の足音に驚いたが、悲鳴が出る前に佑介だとわかると、「こんな夜になにしてるの」と言った。佑介は悪戯に微笑した。

二人とも、こんな夜に公園に来た理由が自分でもよくわからないという同じ理由だったから二人で笑った。彼らは同じ世界の住人だった。

いろんな話をした。小さい頃に美幸を泣かせて、母と一緒に美幸の家へ謝りに行ったことだの、佑介の家の近くの池で遊んでいたけど、いま思えば、よくあんな汚いところで遊んだことだの、この公園で、鉄棒から落ちた佑介の妹をおぶって、美幸が佑介の家まで走ったことだの、草むらのなかに作った段ボールの秘密基地のことだの。……二人はブランコを漕いで、空を見上げた。

「先輩とはどうなの」

少しの間があって、

「ええ、うまくいってるわ」

そう言った、美幸の目が虚ろなことは夜目にもわかった。

「そっか、それならよかった。あいつははつきり物を言うし、冷たいようだけど、根はいいやつだよ。僕なんかよりずっと男らしいし」

美幸は「そうね」とだけ呟いた。沈黙があった。

「ねえ」とお互い同時に顔を見合わせた。佑介はお先にいうように、微笑して顎で返事をした。

「日の出を見ない？ 明日お母さんに怒られるのを覚悟だけど、佑介と一緒にだって言えはどうにかなるでしょ。同じように、わたしも佑介の家に行って謝るわ。ねえ、どう？ それで、佑介の話は？」

佑介は帰ろうと言おうとしていたけど、

「同じことを考えてた、いいよ。日の出見よう」

さすがに寒くなってきたから、ふたりは土管の遊具のなかに移動した。佑介があったかい物を買ってくると言って、近くの自動販売機で、コアとコーンポタージュを買ってきた。好きなことを知っていたけど、美幸にどれがいいと訊いて、コーンポタージュを渡した。

夜明けまであと五時間ある。佑介は日の出を恐れていた。日は昇らず、このまま、夜がずっと続くことを佑介は願った。

この夜に、佑介の口から出たのは、宇宙だったり、輪廻だったり、私がいつも心に唱えていた言葉と同じだった。先輩とは違った。

明日世界が減びるとなれば、いまずぐにでも美幸の手を取って、どこまでも走り出すのに。佑介がそう思っている、明日もおそらく平和だった。

「寒くなってきた」と言って、美幸が佑介に身を寄せてパーカーを掴んだ。佑介は早くなる鼓動が美幸に伝わりはしないかと案じた。案じると鼓動はさらに早くなった。

少しして、寄りかかった美幸が重くなったので、眠ったのが佑介にはわかった。佑介は、そのままひとりで星を見上げた。自分も眠ったことに気づいたのは、美幸に揺り起こされたときだった。

「佑介、起きて」

目覚めると、佑介に、輪廻を終えたそういう感覚があった。……美幸が指さす先には、あの日の帰り道の夕日に似た、水平線に昇る太陽があった。あのとき、自分を憂鬱にした太陽はどこにもなかった。

二人は、ただ黙って太陽を眺めた。しばらくして、佑介はあることに気づいた。

ずっと胸の中にあった痛みは消え、代わりに、いまにでも戦争が起こったとしても、戦うことも辞さない、そういう『覚悟』が生まれていることに……。

「さあ、怒られに行こう」と言って、佑介は美幸の手を強く握った。